

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
1 資料収集・保管活動	資料の計画的な収集・整理・保管ができていますか	自然史系資料収集	中期的資料収集計画(別紙1・2)との整合性がとれているか	概ね設定した収集計画に沿った活動が行えた	設定した収集計画に沿った活動が行えた	年報 p59-60 別紙1, 2	B	・多数の資料を寄贈いただくことができたが、学芸員による採集活動は活発に行えなかった。	B	【論点】 ・博物館活動の根底をなす資料の収集が計画的に実施できているか。 ・収蔵資料のデータベース化など、資料活用のための業務が適切に実施できているか。
		自然史系資料登録	デジタルデータベース化状況<設定目標値(別紙3)>	2,629点	12,440点	年報 p59-60 別紙3	C	・設定した目標を達成した分野が多かったが、課全体での達成率(登録数/目標数)は8割未満(73.8%)であった。	C	【外部評価】 ・自己評価は妥当だが、Bに近いC評価と思う。 ・評価はCであるが、目標点数からみた評価であり、質的にはおおむね良いと思われた。 ・特に、地元密着型の貴重な標本・資料の収集に尽力していることが理解できた。登録点数が前年度実績を下回った部分もあるが、収集・保管活動に向けた努力は十分に認められる。
		歴史系資料収集	資料収集方針(別紙4)に基づいた収集・保存ができていますか	資料収集方針に基づいて収集が行えた	資料収集方針に基づいた収集が行えた	・年報 p.60-61 ・別紙4	B	・小学校の統廃合に伴う学校資料の調査を行って、保存と授業や展示への活用につなげることができた。 ・数の少ない地元の中世文書を購入することができた。 ・全体として、資料収集方針に基づく資料収集を行なうことができた。	B	
		歴史系資料登録	登録点数<寄贈・寄託・購入手続終了点数>	527点	1,000点	・年報 p.60-61 ・別紙4	C	・寄贈・寄託・購入手続が完了しなかった資料群があり、前年度実績を下回った。	C	
	<総合>						C	・収集方針に沿って、必要とされる機会を得て、貴重な標本・資料を収集することができた。しかし自然史系資料の「採集」による収集や、歴史系資料の「登録」などの点数が目標や前年度実績を下回ったので、さらに努力したい。	C	

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
2 調査研究活動	戦略的な調査研究を実施し、博物館の調査研究機能を高めることができているか	研究業績	外部資金応募数・採択数 *令和4年度申請・採否決定分 <採否未定分については申請数からも除外>	申請15件 採択5件	申請23件 採択11件	・年報 p.66-72 ・別紙5	B	・学術振興会(科研費)への申請課題について、代表者と分担者としての申請をあわせると、13件のうち3件(約23%)、他への申請課題3件全て(100%)が採択された。(学術振興会によると、令和3年度の主な研究種目における採択率は27.9%)	B	【論点】 ・研究活動進展に向け、外部資金に積極的に応募できているか。 ・学会発表や審査制(査読付)学会誌への論文投稿など、研究の質の向上に向けて努めているか。 ・研究成果の市民への公開のため、普及書の執筆に努めているか。
			外部資金獲得による継続実施研究課題数 *令和4年度開始分を含む	26件	24件	・年報 p.66-72 ・別紙5	B	・外部資金による実施研究課題数は前年度より増加し、研究活動が活性化したと判断できた。 ・一方、コロナ禍により、多くの研究は計画どおりに実施することができなかった。	B	【外部評価】 ・自己評価は妥当だが、Aに近いB評価だと思う。 ・前年度同様の積極的な研究外部資金への申請が行われており、多くの課題が採択されていた。また、学会発表や審査制の論文発表等について、前年度より出版・発表数が増えており、今後にも期待がもてる。 ・普及書の執筆数は昨年度を下回っているが、対応分野を広げている。
			自然史系 ・学術論文等出版数 ・学会発表数	出版28本* 発表27件	出版24本* 発表22件	・年報 p.67-71	B	・査読付論文を含め学術雑誌に掲載された論文数は前年度と同数であったが、学会発表数は前年度比約123%であった。	B	
			歴史系 ・学術論文等出版数 ・学会発表数	出版8本 発表5件	出版5本 発表0件	・年報 p.71-72	B	・出版数は前年度比3本、学会発表は5件増加した。	B	
			普及書等執筆数	14本 自然史11本* 歴史3本	21本	・年報 p.71-72	B	・執筆数は前年度比で減少したが、依頼に対応して、自然史・歴史両分野の普及書等の執筆を行うことができた。	B	
	<総合>						B	・前年度同様の積極的な研究外部資金への申請を行うとともに、多くの課題が採択される等、博物館の調査研究機能を維持できた。 ・学会発表や審査制の論文発表等について、前年度より出版・発表数が増えた。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

* 館長の実績を含む

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	
3 展示活動	自然史、歴史に関する市民の興味関心を高めるとともに質の高い魅力ある展示ができているか	総入館者数	総入館者数	402,819人	241,736人	・年報 p.10	A	・コロナ禍の制限緩和、充実した内容の特別展の開催、常設展改装(3月4日公開開始)の効果もあり、オンライン予約制により入館者数を制限していたなかでも、総入館数は前年度比約1.7倍に増加した。	A	【論点】 ・来館者の興味を喚起し、知覚を刺激するような展示会や関連企画が実施できているか。 ・展示テーマ・展示意図の正確な伝達や理解の深化に向けた創意工夫がなされているか。	
		有料特別展総観覧者数	有料特別展観覧者数 (まるごとウマ展の令和4年度分と世界の野生ネコ科展の令和4年度分を含む)	156,577人	57,731人		A	・博物館開館20周年記念展(夏・秋・冬)を含めて、オンライン予約制により入館者数を制限していたなかでも、充実した内容の特別展を中止することなく開催することができ、多くの方に観覧いただくことができた。	A	【外部評価】 ・オンライン予約制により入館者を制限していたなかで、かなり健闘していると思う。4回の特別展のうち2回は、自然史課と歴史課が共同で実施した点、ならびに新しい層の入館者が見られるようになった点は高く評価できる。企画展の特記事項も高く評価でき、自己評価ではBとのことだが、A評価でも良いように思う。 ・夏の特別展はコロナ第七波という困難にあっても多くの来場者があったのは、市民の関心の高さや感染防止対策への定評などもあろうし、企画展の内容も多様で工夫が良いと思われる。	
		春の特別展「まるごとウマ展」		人類史に大きく影響を与えてきたウマについて、自然史分野と歴史分野から紹介した。(14,032人/全会期20,516人)			・年報 p.18-19	B	・自然史と歴史の学芸員が共同して実施した展覧会であった。また、騎馬姿勢を示す新しい標本「人馬一体」を今回の展覧会のために制作できたことも意義深かった。来場者には男性1人や成人男女ペアが目立つなど、従来の入場者とは異なる新しい層が入館している様子がうかがえた。一方、目標とした観覧者数(3万人)に達しなかった。	B	・特別展のポスターやチラシについては、デザインやキャッチコピーなどにもっと工夫の余地があったと思う。
		夏の特別展「昆虫博2022」		大量の昆虫標本と生体を駆使し、昆虫の多様性と興味深い生き方などを楽しんでもらうことができた(81,554人)			・年報 p.20-21	B	・大量の実物標本の壁状展示、メタリックカラーに輝く実物標本、巨大な昆虫の生体展示など工夫を凝らした展示を実施し、「新型コロナウイルス感染症が収束しないなか、明るく楽しい思い出を持ち帰ってもらう」という主要テーマを実現することができた。一方、目標とした観覧者数(9.5万人)に達しなかった。	A	
		秋の特別展「トイレのうんちく展」	有意義で内容の充実した特別展を効果的に実施することができたか * 開催の意義と効果 * 入場者数	トイレを題材にして、日本の歴史を縄文時代から現代まで、考古資料・模型を多用して楽しく紹介した(27,193人)			・年報 p.22-23	A	・市内外のさまざまな分野の関係者・機関に協力をいただき展示を開催した。特別会場内に実物大模型を3つ設置して体験できるようにするなど、歴史を楽しく学べる展示となるよう心がけた。目標とした観覧者数(8千人)を超えた。	A	
冬の特別展「うなぎの旅展」		ウナギにまつわる興味深い話題を、生物学や民俗学、歴史学などさまざまな視点から紹介することができた。(観覧者数: 10,788人)			・年報 p.24-25	B	・自然史課と歴史課が共同し、最新の生物学的研究成果から、人とウナギの多様な関わりなど、ウナギに関する多彩で興味深い話題を、実物標本、レプリカ、VR映像、生体など様々な展示資料や手法を用いて紹介し、来館されることが稀であった客層にも観覧いただくことができた。しかし、目標とした観覧者数(4.1万人)には達しなかった。	B			

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由		
3 展示活動	自然史、歴史に関する市民の興味関心を高めるとともに質の高い魅力ある展示ができているか	企画展	有意義で内容の充実した企画展を効果的に実施することができたか	歴史企画展「描かれた加藤清正と清正信仰」	安土桃山・江戸初期の武将である加藤清正の没後から現在までの人気や神格化、信仰の理由に迫った。	・年報 p.28	B	・北九州市の古代から近現代までを、館蔵や市が所有する歴史資料などを紹介し、多様な内容の企画展・テーマ展を開催した。 ・本年度の特記事項としては、学芸員の研究成果や地域の歴史を掘り起こす展示のほかに、閉校予定の小学校から新しい資料を収集し、小学生とともに展示をおこなったことなどが挙げられる。	A	・地域密着型のテーマや内容、初等教育との連携、他施設との連携、オンラインやデジタルサイネージなどの活用など、創意工夫と意欲が感じられる企画展が実施された。		
				歴史企画展「まがたまの美」	北九州市内から出土した勾玉を収集し展示紹介した。勾玉の美しさとその歴史を紹介した。	・年報 p.29						
				歴史企画展「古文書にみる戦国の北九州」	館蔵資料や新たに借用した中世文書を展示し、地域の武士や寺社からみた戦国時代の北九州について紹介した。	・年報 p.30						
				歴史企画展「襦袢「背守り」」	魔除けとして付けられた「背守り」のある着物を中心に、子どもの健やかな成長を願う母親たちの想いについて紹介した。	・年報 p.31						
				歴史企画展「折尾駅ものがたり」	折尾駅で使われた実物資料や写真などを紹介し、折尾駅の役割と工夫、北九州における鉄道の発展について展示した。	・年報 p.32						
				歴史企画展「わくわくタイムトラベル いま・むかし」	小学校3年生社会科単元「かわる道具とくらし」の学習支援を目的として例年おこなっている展覧会。	・年報 p.33						
		展示更新テーマ展など		常設展更新(中世・近世)	展示資料の保護や展示内容の充実の観点・刷新のため、中世史の展示を2度、近世史を1度更新した	・年報 p.35-36	B	・史料保護の観点から新たなテーマを設定し、常設展の展示資料を入れ替えることができた。 なお、デジタルサイネージを利用して展示理解を促進させることができた。	B			
				その他展示(短期展示など)	研究成果の紹介や自然現象の理解深化につながる展示などをおこなった。	・年報 p.37-42	A	・他施設との連携展示3回、名誉館員および学芸員の研究成果展示4回、時宜に合わせたミニ企画展3回、外部への出張展示4回、オンラインによる画像展示を142回更新するなど、さまざまな活動を紹介することができた。	A			
			<総合>						B	・有料無料を問わず、さまざまな場所で、当館の活動や、自然史、歴史に関する興味を喚起する企画をできた。今後も多くの方々に興味を持ってもらえる企画を実施しつつ、解説手法や広報など、さらなる工夫を追求していきたい。	A	

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40%とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

★春の特別展「世界の野生ネコ科展」、企画展「北九州市制60周年記念 北九州市の誕生とその時代」については、次年度の評価対象とする。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
4 教育普及活動	博物館がセカンドスクールとして、子どもたちの来館機会を創出し、理科・社会科への学習意欲を持たせる仕組みづくりを進めているか	セカンドスクール事業(MT主務)	学校団体誘致活動回数<100社>	107社	85社	・年報 p.46	A	・前年度実績を上回り(前年度比126%)、目標値を超えることができた。	A	【論点】 ・博物館の理念実現に向けた教育普及活動が展開できているか。 ・さまざまな年齢や発達段階にある市民に開かれた教育普及活動が実施できているか。 【外部評価】 ・実施数・参加者数ともに前年度よりも著しく回復・増加した。 ・コロナ禍収束につれて、本来の活動の勢いがみられ、さらに飛躍したことは高く評価できる。 ・コロナ禍においても入館制限と緩和を効果的に実施しながら、前年を上回る実績を納め、教育普及活動が展開できている。 ・年齢を問わず市民に愛される博物館を目指した活動が認められる。
			社会見学・修学旅行等 入館団体数 入館者数	707団体 41,022人	379団体 20,258人	・年報 p.46	A	・コロナ禍に伴う入館等の制限緩和により、団体数で197%、入館者数で202%と大きく増加した。	A	
			体験プログラム等 実施回数 参加者数	125回 6,176人	55回 2,711人	・年報 p.46-48	A	・コロナ禍に伴う入館等の制限緩和により、回数で227%、参加者数で228%と大きく増加した。	A	
	市民の知的ニーズに応じた効果的な生涯学習が実施できているか	教育普及講座類(学芸員主務)	館主催普及講座 開講数 参加者数	17講座 255人	19講座 681人	・年報 p.49	B	・コロナ禍に伴う入館等の制限緩和の一方で、博物館の開館20周年記念事業や常設展改装工事を実施するため、普及講座の開講を一部控えたことから、開講数・参加者数が減少した。	B	
			特別展関連普及講座等 実施回数 参加者数	12回 2,019人	0回 0人	・年報 p.18-27	A	・館内でおこなうナイトミュージアムやギャラリー・トーク、講演会や学校団体に向けた展示解説だけでなく、博物館を出て関連施設の見学に赴いたり、試食イベントをおこなったりするなど、さまざまな講座を実施した。	A	
<総合>							A	・積極的な誘致活動を行ったことや、コロナ禍に伴う入館等の制限緩和により、実施数・参加者数ともに著しく回復・増加した。	A	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
5 広報・情報発信活動	多様な広報媒体を活用し、特別展をはじめ博物館活動の情報発信に努めているか	特別展等博物館活動 広報・報道件数	広報・報道(市政記者クラブ)に情報提供した件数	15件	8件	・年報 p.11	A	・令和3年度はコロナ禍に伴うイベントの中止により、市政記者クラブへの情報提供が少なかったが、令和4年度は前年度から倍近い提供を行うことができた。	A	【論点】 ・効果的な広報を行うことができていないか。 ・ターゲット層を設定し、各層に合わせた情報発信を行なっているか。
			広報・報道で取り上げられた件数	・新聞 延べ4紙 609件 ・雑誌等 延べ42誌 86件 ・テレビ 延べ9社 167件 ・ラジオ 延べ4社 86件 ・インターネット 延べ41社 65件	・新聞 延べ14紙 324件 ・雑誌等 延べ30誌 37件 ・テレビ 延べ16社 110件 ・ラジオ 延べ3社 20件 ・インターネット 延べ39社 39件	・年報 p.11	A	・特別展が中止にならなかったこと、開館20周年記念の特別展や記念式典を実施したこと、常設展改装工事を実施し、3月にリニューアルオープンを行ったことなどにより、全体として取り上げられた件数が530件から906件と大幅に増加した。(前年度比171%)	A	【外部評価】 ・活発な広報活動が行われている。 ・広報の取り組みに加え、リニューアルによる社会の反応が高まった年となり、大きな広報成果が残せたと思われる。 ・報道機関、特にテレビニュース等への露出度が向上し、情報発信には成功していたと感じられた。 ・駅のホームの一部を展示施設として利用するなど、創意工夫も感じられた。
			ホームページアクセス数	779,274件	694,901件	・年報 p.11	B	・各種イベントや特別展等に関する情報を随時掲載したほか、SNSでの情報発信件数も増加したため、アクセス数も増加した(トップページのみは前年度比112%)。	A	
			SNS(Twitter、Facebook、Instagram、Youtube)での投稿件数・フォロワー数	729件 16,983人	772件 13,289人	・年報 p.11	A	・リニューアルを記念して、2日間にわたりSNSフォロワー増に向けたキャンペーンを実施し、新たに400人を超えるフォロワーを得た。 ・投稿件数は若干減少したが、フォロワー数が前年度比128%と増加した。	A	
	<総合>						A	・報道機関への情報提供やSNS等の積極的活用により、前年度を上回る情報発信ができた。 ・リニューアルを広く周知するため、博多駅や小倉駅をはじめ九州一円の主要駅のデジタルサイネージを活用し広く広報を行った。	A	

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
6 市民との協働	博物館ボランティア(シーダー)の参画により市民との協働による取り組みが進められているか	博物館ボランティア(シーダー)の活動支援	シーダー登録者数(50人)	44人	53人	・年報 p.56	B	・活動休止が続かなかで、特に新たな登録者が活動できないまま退会する事例などがあり、登録者数が減少した。	B	【論点】 ・新型コロナウイルス感染症の拡大状況などに応じて、活動の支援や必要な対応を行うことができたか。 ・活動の際の安全管理を徹底することができたか。 ・活動再開に向けた方針や計画を策定できたか。 【外部評価】 ・ボランティア活動を一部再開するとともに、友の会活動の支援も行われている。 ・感染防止対策とコロナ後の活発化した活動をともに進め、定期的、あるいは不定期な実施を数多く遂行したことは高く評価できる。 ・コロナ禍のうねりの中で、効果的に対策を実施しながら、講演等の実施数・参加者数とも、着実に回復に向かわせることができていた。
			活動再開に向けた計画策定状況等	活動の一部再開	館内会議(再開に向けて)意向調査	・年報 p.56	A	・新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から活動を休止していたが、検討を重ねたのち、令和4年12月9日から活動を一部再開できた。	A	
	友の会の活動を支援するなど、友の会と連携できているか	「自然史友の会」の活動支援	活動再開に向けた計画策定状況	友の会活動再開に向け、他施設から発出される様々な情報の提供や、友の会役員らの協議の補助を実施した	友の会役員とコロナ禍での活動に係る協議や、友の会主催活動の再開に向けた補助を実施した	・年報 p.57	A	・文化庁や日本博物館協会などが発出する新型コロナウイルス感染症対策の情報提供を行い、友の会の部会活動再開に寄与することができた。	A	
			講演会 実施回数 参加者数	12回 958人	7回 493人	・年報 p.58	A	・参加者数など一部変更して安全に配慮しながら、当初計画のとおり歴史・考古・美術の多彩な講演会を実施できた。 ・そのほか、特別展や東アジア友好博物館交流事業シンポジウムなどの館主催事業に共催するなど、ともに協力して事業を実施できた。	A	
			史跡めぐり 実施回数 参加者数	5回 138人	1回 30人	・年報 p.58	A	・コロナ禍に伴う入館制限の緩和を受け、当初計画のとおり5回、安全に配慮しながら実施した。	A	
	<総合>						A	・コロナ禍に伴う入館制限の緩和を受け、ボランティア活動を一部再開するとともに、友の会活動も当初計画のとおりほぼ実施できた。	A	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
7 社会貢献	学術研究機関として社会に貢献し、シンクタンク機能を果たすことができているか	学術研究機関として、大学等外部機関への支援ができているか	委員等就任 人数 件数 他機関からの依頼に応え専門分野を生かして努めているか	16人 104件	17人 107件	・年報 p.52-55	A	・大半の学芸員が委員に就任しており、委員会への参加件数も前年度とほぼ同数で、行政機関や学術団体への依頼に対応できた。	A	【論点】 ・自然史・歴史に関する学会や専門委員会などへの協力依頼に応えられているか。 ・大学やさまざまな機関からの講演などの協力依頼に応えられているか。 ・研究や教育普及活動に必要な資料の貸与依頼に対応できているか。
			外部機関の依頼による講演などの対応回数 他機関からの依頼に応え専門分野を生かして努めているか	77件	69件	・年報 p.52-55	A	・学校(小学校～大学)や市民団体、市の施設などの依頼に応え、学校教育・社会教育に貢献できた。	A	【外部評価】 ・シンクタンク機能を果たすことができていた。 ・多様な専門的知識によって、地域内外において、質的にも数的にも大きな貢献をしているといえる。 ・学芸員の講演・講義や資料借用依頼への対応がコロナ禍の中ながらも昨年度実績を上回っていた。
		資料貸出	資料貸出者(団体)数 貸出点数 他機関からの依頼に応え、博物館資料を適切に貸し出しているか	48団体 455点	77団体 433点	・年報 p.64-65	A	・前年度と団体数は減少したが、貸出点数は微増しており、学術研究や教育普及活動に係る資料の貸出依頼に適切に対応した。	A	
	<総合>						A	・外部機関からの講演や資料借用依頼等に対し、前年度同様あるいはそれ以上の対応ができており、博物館のシンクタンク機能を果たすことができた。	A	

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
8 その他 北九州ミュージアムパーク創造事業	北九州ミュージアムパーク創造事業によって新たな取り組みが行えたか	東田地区を北九州市の新たな賑わいづくりの拠点とするための事業の実施状況	博物館を軸に、東田地区を中心とする関係施設の連携を強化するための事業を実施できたか	秋の特別展とそれに関連付けた東田三館連携企画展(SDGsが共通テーマ)を開催した。	春と秋の3回、連携企画展を開催し、それに合わせて合同のイベントを実施した。	・年報 p22-23,43	A	・秋の特別展「トイレのうんちく展」は地元企業および企業ミュージアムとの連携・協力を受けて、より充実した内容で開催することができた。またそれに関連付けた東田三館連携企画展については、様々な事業において適切かつ効果的な施設間連携の一つのモデル事例を提示できた。	A	【論点】 ・北九州ミュージアムパーク創造事業による事業によって、①地域の中核として社会を包摂する博物館となるための展示環境の改善・向上および計画策定ができたか、②文化財保護法の「地域計画」の実例として他地域のモデルとなるような事業が行えたか。 【外部評価】 ・「トイレのうんちく展」を始め重要な事業を行うことができた。 ・関係機関との関わりのなかで積極的に役割を果たしており、当初の計画以上に十分な成果を出せている。 ・北九州ミュージアムパーク創造事業に基づき、各館と連携した企画展や常設展改装などの取り組みがなされており、東田地区のにぎわいづくりに大きく貢献している。
		当館を東田地区さらには北九州市の中核館としての魅力向上を目指した事業の実施状況	常設展の展示改装を計画どおり実施できたか デジタルアーカイブ化事業を計画どおり実施できたか	常設展改装工事およびデジタルアーカイブ化事業を計画どおり実施できた。	収蔵資料等のデジタルアーカイブ化や展示照明の改善を進めるとともに、楽しみながら学習してもらええる可能性を秘めた展示改修計画を策定した。	・年報 p12-17,43	A	・10年ぶりに本格的な常設展改装を計画どおり実施することができた。 ・デジタルアーカイブ化事業では、計画どおり実施し、歴史資料ライブラリとして公開をおこなっている。	A	
	<総合>						A	・秋の特別展「トイレのうんちく展」と、関連した東田三館連携企画展の開催、常設展改装、デジタルアーカイブ化事業など、重要な事業を計画どおり実施することができた。	A	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	意見
1 資料収集・保管活動	C	<ul style="list-style-type: none"> ・収集方針に沿って、必要とされる機会を得て、貴重な標本・資料を収集することができた。しかし自然史系資料の「採集」による収集や、歴史系資料の「登録」などの点数が目標や前年度実績を下回ったので、さらに努力したい。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価は妥当だが、Bに近いC評価と思う。 ・評価はCであるが、目標点数からみた評価であり、質的にはおおむね良いと思われた。 ・特に、地元密着型の貴重な標本・資料の収集に尽力していることが理解できた。登録点数が前年度実績を下回った部分もあるが、収集・保管活動に向けた努力は十分に認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料登録の評価指標が自然史系資料登録では「データベース化状況」、歴史系資料では「登録点数」となっている。この点の統一を検討した方がよい。 ・資料の登録がスムーズに進むためのシステムづくりがさらに工夫されるとよいかもしいない。 ・今後の地元密着型の標本・資料収集と効果的な活用に努めていただきたい。
2 調査研究活動	B	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度同様の積極的な研究外部資金への申請を行うとともに、多くの課題が採択される等、博物館の調査研究機能を維持できた。 ・学会発表や審査制の論文発表等について、前年度より出版・発表数が増えた。このような改善傾向をさらに追求していきたい。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価は妥当だが、Aに近いB評価だと思う。 ・前年度同様の積極的な研究外部資金への申請が行われており、多くの課題が採択されていた。また、学会発表や審査制の論文発表等について、前年度より出版・発表数が増えており、今後にも期待がもてる。 ・普及書の執筆数は昨年度を下回っているが、対応分野を広げている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「改善傾向をさらに追求していきたい」とのことなので、さらなる発展を期待している。 ・外部資金は多く獲得できているが、研究にあてる時間的資源が不足している印象である。現段階では資金の新規獲得以上に、研究時間をつくること、例えば研究日の設定を検討することも一策かもしれない。 ・今後も学芸員の専門性を活かした研究等を積極的に進めて欲しい。
3 展示活動	B	<ul style="list-style-type: none"> ・有料無料を問わず、さまざまな場所で、当館の活動や、自然史、歴史に関する興味を喚起する企画をできた。今後も多くの方々に興味を持ってもらえる企画を実施しつつ、解説手法や広報など、さらなる工夫を追求していきたい。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン予約制により入館者を制限していたなかで、かなり健闘していると思う。4回の特別展のうち2回は、自然史課と歴史課が共同で実施した点、ならびに新しい層の入館者が見られるようになった点は高く評価できる。企画展の特記事項も高く評価でき、自己評価ではBとのことだが、A評価でも良いように思う。 ・夏の特別展はコロナ第七波という困難にあっても多くの来場者があったのは、市民の関心の高さや感染防止対策への定評などもあろうし、企画展の内容も多様で工夫が良いと思われた。 ・特別展のポスターやチラシについては、デザインやキャッチコピーなどにもっと工夫の余地があったと思う。 ・地域密着型のテーマや内容、初等教育との連携、他施設との連携、オンラインやデジタルサイネージなどの活用など、創意工夫と意欲が感じられる企画展が実施された。 	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン予約制であった点を考えると、特別展の目標観覧者数の設定が高い場合があるように思う。 ・学芸員及び名誉館員の研究成果展示は、今後も活発に行っていたきたい。 ・今後も地元密着型や意表を突く「企画の妙」で企画展やミニ企画展を積極的に実施していただき、話題のメディア露出に努めていただきたい。 ・デジタルサイネージの効果的な活用を試みていることは評価でき、今後も活用して欲しい。
4 教育普及活動	A	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的な誘致活動を行った一方で、コロナ禍に伴う入館等の制限緩和により、実施数・参加者数ともに著しく回復・増加した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・実施数・参加者数ともに前年度よりも著しく回復・増加した。 ・コロナ禍収束につれて、本来の活動の勢いがみられ、さらに飛躍したことは高く評価できる。 ・コロナ禍においても入館制限と緩和を効果的に実施しながら、前年を上回る実績を納め、教育普及活動が展開できている。 ・年齢を問わず市民に愛される博物館を目指した活動が認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症の5類移行を受けた今年度の実績に大きな期待をしている。

評価項目	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	意見
5 広報・情報発信活動	A	<ul style="list-style-type: none"> ・報道機関への情報提供やSNS等の積極的活用により、前年度を上回る情報発信ができた。 ・リニューアルを広く周知するため、博多駅や小倉駅をはじめ九州一円の主要駅のデジタルサイネージを活用し多方面に広報を行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・活発な広報活動が行われている。 ・広報の取り組みに加え、リニューアルによる社会の反応が高まった年となり、大きな広報成果が残せたと思われる。 ・報道機関、特にテレビニュース等への露出度が向上し、情報発信には成功していたと感じられた。 ・駅のホームの一部を展示施設として利用するなど、創意工夫も感じられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も積極的な情報発信に努め、メディアへの露出度を上げてほしい。ひいては子どもたちの、「わが街に『いのたび』あり！」のシビックプライドにもつながると考える。 ・ぜひ小学生・幼児向けのホームページも開設してほしい。
6 市民との協働	A	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍に伴う入館制限の緩和を受け、ボランティア活動を一部再開するとともに、友の会活動も当初計画のとおりほぼ実施できた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動を一部再開するとともに、友の会活動の支援も行われている。 ・感染防止対策とコロナ後の活発化した活動をともに進め、定期的、あるいは不定期な実施を数多く遂行したことは高く評価できる。 ・コロナ禍のうねりの中で、効果的に対策を実施しながら、講演等の実施数・参加者数とも、着実に回復に向かわせることができていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症の5類移行を受けた今年度の実績に大きな期待をしている。
7 社会貢献	A	<ul style="list-style-type: none"> ・外部機関からの講義や資料借用依頼等に対し、前年度同様あるいはそれ以上の対応ができており、引き続き博物館のシンクタンク機能を果たすことができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・シンクタンク機能を果たすことができていた。 ・多様な専門的知識によって、地域内外において、質的にも数的にも大きな貢献をしているといえる。 ・学芸員の講演・講義や資料借用依頼への対応がコロナ禍の中ながらも昨年度実績を上回っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症の5類移行を受けた今年度の実績にさらに大きな期待をしている。

評価項目	自己評価	自己評価の理由	J	外部評価の理由	意見
8 その他 北九州ミュージアムパーク創造事業	A	・秋の特別展「トイレのうんちく展」と、関連した東田三館連携企画展の開催、常設展改装、デジタルアーカイブ化事業など、重要な事業を計画どおり実施することができた。	A	・「トイレのうんちく展」を始め重要な事業を行うことができた。 ・関係機関との関わりのなかで積極的に役割を果たしており、当初の計画以上に十分な成果を出せている。 ・北九州ミュージアムパーク創造事業に基づき、各館と連携した企画展や常設展改装などの取り組みがなされており、東田地区のにぎわいづくりに大きく貢献している。	・東田三館の連携をさらに進めて、多くの市外の学校を修学旅行、社会見学等に誘致していただきたい。ひいては子どもたちの、「わが街に『いのたび』あり！」のシビックプライドにもつながると考える。 ・常設展改装により、さらにリピーターが増えることが期待される。今後も社会を包摂する地域の中核展示施設として、創意工夫を凝らした展示環境の改善・向上や計画策定を期待したい。また地元密着の文化財保護・展示施設としての役割にも期待していきたい。
総合評価	B	・開館20周年の年に、特別展や企画展の充実と常設展の改装、教育普及活動や広報・情報発信活動の強化などに取り組んで、年間の入場者数が40万人を超えることができた。 ・外部資金を用いた研究や展示環境整備、博物館のシンクタンク機能強化については、よく実施できた。 ・資料収集・保管活動については、目標や前年度実績を下回った部分があり、改善に努めたい。	B	・Cの評価項目もあったことから、自己評価と同じBとしたが、Aに近いBという評価である。 ・開館20周年にまつわる、みえない業務や、目標値に現れないところでの工夫や努力が相当にあったと考えられる。 ・館を見学しただけでは分からない、外部資金を用いた研究や、学芸員の講演・講義、資料貸出、資料収集・保管活動等も着実に進められており、高く評価できる。 ・コロナ禍の中にあつて、入場者数増を達成するとともに、北九州ミュージアムパーク創造事業で他館と効果的な連携が行われていた。 ・北九州ミュージアムパーク創造事業によって博物館の担う役割がより明確により高遠になったと感じる。	・博物館活動の根幹である調査研究の成果は着実に挙がっており、他の活動とのバランスもとれているため良好な状態と思う。 ・博物館の根幹ともなる評価項目1～3が、A評価になるためには、さらなる業務を上乘せするのではなく、力を注ぐ業務の配分を変えることも大切ではないか。 ・新型コロナウイルス感染症の5類移行を受けた今年度の実績にさらに大きな期待をしている。

評価基準 A：大変良い、B：概ね良い、C：やや不十分、D：不十分